

平成22年度卒業式 学長式辞

愛媛大学長 柳澤 康信

本日ここに学位記を授与された1,856名の卒業生の皆さんに、心からお祝いを申し上げます。本日の式典には、先ほど紹介させていただきましたように、各界を代表する来賓の皆様にご臨席を賜りました。お忙しい中、ご臨席いただいたことに厚くお礼を申し上げます。また、本式典にご出席のご家族、関係の皆様に対して、心よりお慶びを申し上げますとともに、日頃からの本学に対するご理解・ご支援に対して、この場を借りて深く感謝申し上げます。

卒業される皆さんは、在学期間中にそれぞれいろんな困難や苦労があったことと思います。それを克服して今日の日を迎えるに至った努力を讃えたいと思います。皆さんが自分の苦難を振り返ってみると、ひとりだけで乗り越えられたのではないことに思い当たるはずです。そこには必ず、家族、友人、先輩や後輩、指導教員などの暖かい支援や助言があったはずで、それらの人たちへの感謝の思いを今一度自分の胸に刻み付けて、これからの人生の糧にして頂きたいと思います。

卒業する皆さんの大部分は就職し、社会に巣立って行くわけですが、大学卒業は人生の一つの大きな節目であり、未知なる新しい社会への船出でもあります。この節目にあたって、いま自分がなすべきことは何かを考え、目標をしっかりとって努力すること、このことをぜひ肝に銘じて下さい。また、450名前後の卒業生は大学院に進学し、勉学活動が続けることとなりますが、大学院に進学することも社会に巣立つのと同じように、大きな節目であります。大学院では学部での勉学と質的に違う深い研究能力と広い領域の知識の修得が求められます。社会に巣立つにせよ大学院に進学するにせよ、大切なことは主体的に学ぶ姿勢を常に堅持し、これまでに培った「知の力」をさらに向上させることです。

今日、人間社会を大きく捉えると、多くの識者が指摘しているように、産業社会から知識基盤社会へ移行しつつあります。知識基盤社会とは、「新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す社会」と定義されています。このような社会においては、既存の知識体系を学ぶことよりも、自分で問題を見つけ、その解決に向けて自分で学ぶこと、すなわち、課題解決型の主体的学習がより重要になります。皆さんはすでに実感していることと思いますが、見たり聞いたりしただけではなかなか知識は身につけません。相手に質問したり、相手と議論を戦わせたりすることによってはじめて理解が深まります。そして、

さらに誰かに教えることによってその知識が確実なものになります。すなわち、知識を本当に獲得するためには、質問したり、議論したり、教えたりする仲間の存在が重要です。

仲間の存在は実社会に出たとき特に重要になります。これからの社会では、プロジェクト的なチーム活動が多くなります。知識はひとりひとりがもつものですが、個人がもつ知識はそれぞれ異なっています。異なる関心や発想をもつメンバーが集まって、考えを出し合い、徹底的に議論することによって、当初誰も気づかなかった新しいアイデアに到達することがあります。これがこれからの「知の創造」です。

和を尊ぶ日本人は議論が苦手であるとよく言われます。若い人たちの間にも、相手の意見や考えを批判することを控える風潮があります。しかし、議論の場において、批判することは決して相手を否定したり、相手を攻撃したりすることにはなりません。批判することは、むしろ、その場に参加している人の義務でさえあります。議論することの目的は、みんなで新しい知を創造することにあるのだということをぜひ認識して頂きたいと思います。

さて、今回の東日本の大震災は地震、津波、原発事故が同時発生して、未曾有の被害をもたらしました。改めて、亡くなられた方々のご冥福をお祈り申し上げますとともに、被害を受けられました皆様に心よりお見舞い申し上げます。

この大震災は、日本人だけでなく世界の人々にも大きな反響をもたらしました。海外のマスメディアが驚きの目で報じているのが、甚大な被害を受けながら人々が沈着で節度ある態度を失わなかったことです。例えば、哲学講義「白熱教室」で日本でも有名になったマイケル・サンデル教授は、次のように述べています。「日本では、いくら街が廃墟になっても、人々は自制心をゆるめず、わが街のために結束している。被災後の市民のふるまいには胸を打たれました。」この発言の背景には、海外の多くの国で大災害の直後に民衆が暴徒と化し略奪や強奪が起こったり、また被災地周辺で生活必需品が通常の何倍というあくどい便乗値上げが起こったりするという事情があります。そのようなことが日本では起こっていない。このことを我々はそれほど特別だとは思いませんが、外国の人々にとって驚嘆すべき事柄であるようです。我々が日頃あまり意識していないこのようなすぐれた資質をこの機会に再確認し、日本の将来に活かしていく必要があると思います。

また、今回の大震災で明らかになったことは、日本の、そして世界のきわめて多くの人々が、この震災をわが身のこととして感じ、被災地とともに悲しみ、被災した人々のためなら協力を惜しまないという共通の気持ちをもったことです。この気持ちには、人間が本来もっている共感する能力が表れているように思います。共感とは「共に感じる」

と書きますが、英語ではエンパシーと言います。心理学や行動学では、共感する能力を「相手の感情や意図を即座に感じ取り、同一化によって相手を慰めたり、相手と協調行動を取ったりする能力」と定義されています。類似した言葉に同情（シンパシー）がありますが、シンパシーとは人に同情する、人の痛みがわかる、そういう気持ちです。一方、エンパシーは、相手のものの見方を共有し、相手の体験に沿って何らかの行動を起こすところまで含みます。この能力は、動物の中ではほぼ人間だけに見られる能力で、人間が「他者のものの見方や視点を読み取る」能力や「模倣する」能力などの高い認知能力をもつことに起因していると考えられています。

現代社会では、人は競争的な環境に曝され、競争相手に勝つことが常に求められています。そのため、日常的にはこの共感能力はなかなか社会的現象とはなりません。ところが、今回のような大災害があると人間が本来もっている共感能力が発動されて、さまざまな支援行動やボランティア活動に表れて社会の大きな潮流になるのだと思います。大災害のときに人間が本来もっているすぐれた資質が発揮される。このことに私は未来への希望と可能性があるように感じます。

最近、日本は経済的に低迷を続け、国際的な地位も低下して、社会全体が閉塞感に包まれています。今回の大震災はきわめて大きな悲劇であり、経済的にも大きな打撃ですが、閉塞感に覆われた現在の社会を新たな社会に作り直すよい契機になるのではないかと私は思います。どのような社会に作り直すのか、まだ誰にもはっきりとその道筋が見えていないかもしれませんが、皆さんのような若い世代がその中心的な担い手になるのは間違いありません。社会を作り直すときに、私がいま申し上げた共感（エンパシー）がひとつのキーワードになると感じています。アメリカのオバマ大統領も、選挙演説のキーワードとしてエンパシーという言葉を使いました。オバマ大統領は、この言葉に「人種、宗教などの違いを乗り越えて、相手に感情移入し、互いに理解し合おう」というメッセージを込めていたようです。現在の日本社会、特に都会では、人と人のつながりが希薄で、人は孤立しがちであり、「無縁社会」という寒々とした言葉まで生まれています。先ほど述べましたように、知識基盤社会では仲間の存在や人と人とのつながりが重要です。これからの社会においては、立場の異なる多様な人々がそれぞれの役割を果たしながら、根幹の部分では共感しあっているという人間関係が構築されなければならないと思います。

皆さんが大学を卒業するその月に今回の大震災が起こりました。皆さんはこのことを一生忘れないでしょう。皆さんがいま被災地や被災された人々に感じている気持ちは尊いものです。いま大事なはその気持ちをいろんな形で実践活動に移すことだと思います。

愛媛大学では大学憲章において「自ら学び、考え、実践する能力と次代を担う誇りをもつ人間性豊かな人材を社会に輩出することを最大の使命とする」と謳っています。今回卒業される皆さんが愛媛大学で培った学識や行動力をこれから遺憾なく発揮され、多くの人々と力を合わせて未来を切り開いてもらいたいと思います。皆さんが、将来さまざまな分野で社会の担い手になり、社会の発展を牽引する役割を果たされることを期待して、皆さんの門出にあたっての私のはなむけの言葉といたします。